

扉の外の世界から母親の声が聞こえてきた。

「彩、あともう少しで高校受験だね。少しだけでも学校に行ってみない？」

私は近くにあった本を持って思いっきり扉に投げつけ、「うるさい。」

と、怒鳴った。言ってしまったからでは遅い。私はすぐに後悔した。どうしても素直になれない。私だって部屋に引きこもってないで学校に行きたい。だけど家から出ようとすると、鼓動が速くなり息が苦しくなる。私はそう思いながらベッドに入って考えた。

（いつからだろう、毎日がつまらなくなつたのは。

いつからだろう、学校を休み始めたのは。休みはほとんど増えていってしまった。

だけど木曜日だけはしつかり行った。

いつからだろう、木曜日も休み始めたのは。

人は一人では生きていけないとお母さんは言う。

それはわかつてる。

だけど一人でいるのが一番楽である。

他の人とは関わりたくない。）

そんなことを考えていると眠くなつてきたので私は静かに目を閉じた。

目がさめると夜になっていた。私は一年の中でこの寒い季節の夜が好きだ。なぜなら、空気が澄んでいて星が一番綺麗に見えるからである。私は星がこの世界の中で一番好きだ。なぜなら、星は全人類のお母さんのような気がするからである。星を見ていると落ち着くし、寂し

い時や悲しい時に見ると元気が出てくるからである。そして、夜という寂しく悲しい時間帯になるといつも出てきて見守ってくれるからである。そんなことを考えながらゆっくり起き上がった。

電気をつけると、目の前に見知らぬ男の子が星を見ながら静かに泣いていた。私は驚いて、

「あんた誰？」

と、言った。すると男の子はゆっくり振り向いた。その男の子は五歳六歳くらいの子で髪の毛がなく、しゃつくりをしながら静かに泣いていた。

「俺、森山望。小一。」

「なんでここにいるの？」

と、訊くと望は大粒の涙をたくさん流し始めた。望の顔は涙と鼻水でくしゃくしゃになっていった。しばらくすると望はゆっくりと話し始めた。

「俺、幽霊なんだ。小児がんってやつで死んじゃったんだ。気づいたらここにいて、どうすればいいかわからなくなっちゃった。どうしようお姉さん。」

「どうしようって言われても、ここからは出ていってくれないかなあ。」

「お願い。ここにいさせて。一週間でいいから。行くところが決まるまで。お願い。」

と、望は涙を頑張つてこらえながら言った。私は小さい子の涙には弱い。

「わかった。一週間だけだよ。」

と、言ってしまった。すると望は少し笑顔になった。

「ご飯食べる？」

「うん。」

「何が食べたい？」

「ハンバーグ。」

一階に降りて、大きいハンバーグを作ってあげた。望はそのハンバーグを美味しくそうに食べた。

「お姉ちゃんなんていう名前？」

「私は星宮彩。中三だよ。学校には行ってないけどね。」  
「なんで？」

「学校に行くの飽きちゃったんだ。」

望は納得してないような顔で、

「ふーん。そうなんだ。」  
と、言った。

食べ終わった後私はいつものように星座観測をした。

空にはオリオン座が綺麗に輝いていた。望が、

「お姉ちゃんなんの星座が好きなの？」

と、訊いてきた。私はすぐに、

「オリオン座。」

と、答えた。望も楽しそうに星を見ていた。

「そういえば、小学生だっけ？」

「そうだよ。だけど一回も学校行ったことないんだ。ずっと行きたかったんだけど、入学式の前日に倒れちゃって小児がんが見つかったんだ。友達百人作りたかったなあ。ランドセル背負って登校したかったなあ。お姉ちゃんはいいなあ。」

「なんで？」

「学校に行けて。勉強できて。友達できて。」

それを聞いて私は今までの自分の行動を後悔した。学校に行きたくても行けない人がいるのに、学校に行ける人が飽きたからという理由で学校に行かないなんて自分が情けなくなってきた。その後何も答えられなくなってしまう。

そのあと、ランプをやったりウノをやったりした。そのあと望に少し勉強を教えてあげたらすごく嬉しそう

に勉強をしていた。

そんなことをしているうちにあつという間に六日が過ぎっていった。いつの間にか望にはなんでも話せるようになったっていき、これまで話せていなつかたぶんを一気に話した。私の話を望はいつもしっかり聞いてくれた。そして望は真剣そうな顔をして訊いてきた。

「あと一日でここから出ていかないダメ？」

私は答えられなかった。黙って視線を窓の外に移した。雲の間からは満月がきれいに輝いていた。

しばらくすると望が嬉しそうな顔をしながら訊いてきた

「今から星を見に行かない？」

と、言った。私は少し悩んだが今なら外に出られると思つたから、

「いいよ。」

と、答えた。すぐに準備して出発した。

私は久しぶりに外に出ることができて嬉しかった。電車を乗り継ぎ長野に着くともう昼だった。そして、星が見えそうな場所を探した。するととても広い野原を見つけた。そこにレジャーシートを敷き、家から持ってきたおにぎりを食べ、遊んで寝た。

目が覚めると、夜になっていた。空にはたくさん星がたくましく輝いていた。特にオリオン座は、今さそり座と戦ったら勝てそうなほど綺麗に輝いていた。美しさのあまり最初は声が出せなかった。一生眺めていても飽きなさそうな空だった。

しばらくして、長野で星を見た証として二人で写真を撮った。望も私も楽しそうに笑っていた。すると望が話し始めた。

「綺麗に写ってるね。そういえば、俺、思い出したんだ。

死ぬ直前の時のこと。誰もいなかったはずなのに上の方から声が聞こえたんだ。『あなたには死んでからある人に会ってもらおう。その人は外の世界に出られないでいる。一週間あげるから、その人を外の世界に出してあげて。』って言うてた。最初は分からなかったけど、お姉ちゃんのことだったんだね。お姉ちゃん、もう大丈夫だよ。ね。バイバイ。」

私は理解できなかった。だけどさっき撮った写真を見たときやつと理解できた。そこには楽しそうに笑う私の姿しかなかった。いつの間にか私の目には涙がたまっていた。そして大きく息を吸って叫んだ。

「ありがとう、望。本当にありがとう、望。」  
私は思った。

（他の人にとってはただの一週間かもしれない。だけど私にとっては何十年にも変えることができないサイコロの一週間だった。明日からはしっかりと学校に行こう。）

私はオリオン座が見えなくなるまでずっと一人で見てから帰った。家に帰ると、お母さんが、安心して泣き出しそうな顔をして抱きついてきて言った、

「彩、心配したんだから。でもよかった。帰ってきてくれて本当によかった。」

そして私はお母さんの顔をしっかりと見て明るい声で答えた。

「お母さん。何も言わずに家から出って行ってごめん。私、明日から学校に行くことにしたからお弁当よろしくね。」

お母さんは一瞬驚いた顔をしたがすぐに笑って、「わかった。明日は彩が好きな竜田揚げを弁当に入れるね。」

と、言った。

その日の夜の空ではオリオン座がいつにも増して強く  
綺麗に輝いていた。